

異文化研究交流センター ニューズレター

この1年を振り返って

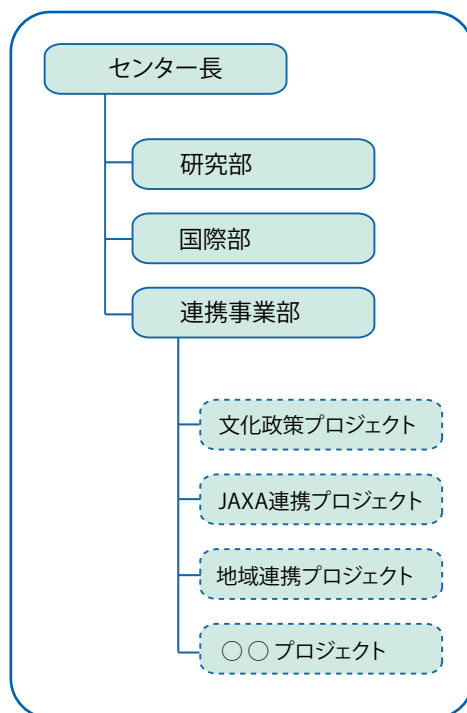
異文化研究交流センター（Intercultural Research Center: 略称はIREC）は、学部と研究科における異文化研究をさらに発展させるとともに、その成果を生かして連携や国際交流を促進させることを目的とし、6年前に設置されました。皆様方の温かいご支援のもと、本年度は毎年企画しているさまざまな活動に加え、新たに、国際文化学部教員や招聘研究員の研究発表会としての「国際文化学のフロンティア」の開催、JAXA との協定連結などに取り組んできました。研究会や講演会では外部からの聴講者も多々あり、センターをひとつの開かれた窓として研究科の広報にもなったのではないかと思います。一昨年から開始した協力研究員制度も徐々に制度が整い、研究員という立場をバネにして新しい活動の場を見出した人も出てきています。とはいえ、まだまだ未熟なセンターではあります。皆様方のさらなるご支援を期待しております。

活動はますます多様化活発化していますので、次年度から実情に合わせた組織へ再編することとなりました。私はセンター長を2期務めましたが、この3月で任期を終えます。4月からは新しいセンター長のもと新しい組織で、さらに飛躍してセンターが国際文化学研究科の研究交流拠点となるように願っております。

センター長 三浦伸夫

（国際文化学研究科教授）

新組織



● 2011 年度学術推進研究員

石黒大岳

● 2011 年度協力研究員と研究テーマ

- | | |
|--|---|
| ・植朗子 「グリム兄弟『ドイツ伝説集』におけるモチーフ研究」 | ・沼田理衣 「音楽療法、コミュニティアートにおける創造的音楽活動について」 |
| ・エルドンバヤル
「蒙古青年結盟党（1938-1941年）から蒙古青年革命党（1944-1945年）へー日本支配期から戦後にかけての内モンゴルにおける民族主義政党ー」 | ・野村恒彦 「19世紀英国における科学（特に数学）と自然神学」 |
| ・鬼頭尚義 「歌人伝説の形成と展開」 | ・松井真之介 「フランスのアルメニア人ディアスポラのアクチュアリティに関する研究」 |
| ・高岡智子 「東ドイツとハリウッド映画音楽の比較研究ー文化政策とメディア史的観点からー」 | ・山田勅之 「清代雲南ナシ族に関する歴史研究ーナシ族の首領木氏を中心に」 |
| ・寺尾智史 「『リキッド化する社会』における言語多様性保全」 | 「チベット自治区ラサ市における観光産業発展の動態」 |
| ・彭程 「占領下の官吏養成教育」 | ・劉澤軍 「文の結束性に関する日中対照研究ー主題の省略の視点からー」 |

2011年度 活動報告

研究部

ヨーロッパにおける多民族共存と EU ——言語、文化、ジェンダーをめぐって——

(プロジェクト代表者：坂本千代 教授)



国際ワークショップ「日欧関係の歴史・文化・政治」
(2012年3月6日) (上) コメントする坂本千代教授
(下) パネリスト: 左からLanna氏(ナポリ東洋大学准教授)、
López Vidal氏(カタロニア放送大学准教授)、
Vande Walle氏(ルーヴェン・カトリック大学教授)

国際ワークショップ「日欧関係の歴史・文化・政治」(神戸大学のブリュッセル・オフィスで開催)に他のメンバー3人も参加し、今後の私たちのヨーロッパ研究に新たな方向性を見出すことができました。今年度のプロジェクト・メンバーの主な活動は以下のとおりです。

- ・ヨーロッパにおける多民族共存や多文化共存が芸術作品や文化活動にどのように影響しているかをベルギーなどを例として分析・考察しました。
- ・ヨーロッパの国々において多民族共存、マイノリティと少数言語保護がどのように行われているかをフランスなどを例として分析・考察しました。
- ・外部から研究者を招いて、オランダ、イタリア、ベルギーなどにおける文化やジェンダーの諸問題に関する講演



講演会「EUにおける音楽活動の現状——外国人、移民の立場」(2011年7月14日) 講師: 正木裕子氏(左)、日野原秀彦氏(右)

ヨーロッパを対象としたプロジェクトが4年目を終えようとしています。基本的にはこれまで3年間の研究や研究発表・講演などの蓄積を踏まえ、今年はさらにそれらを深めると同時に新分野の開拓もめざすという意味を込めて、サブタイトルに「言語、文化、ジェンダー」を出しました。

また、2012年3月には、本プロジェクトのメンバーの一人である坂井一成准教授が企画する国際ワークショップ「日欧関

をしていただきました。

来年度以降はさらにヴァージョンアップした研究活動ができることを願っております。



第1回研究セミナー「ベルギーにおける多文化共存の諸相」(2011年12月22日) 講師: 三田順氏(左)、岩本和子教授(右)



(左) 第2回研究セミナー「『組み合わせ』の技法——オランダ社会におけるワークライフバランスの実践」(2012年1月24日) 講師: 中谷文美氏
(右) 第3回研究セミナー「フランスのマイノリティにおける言語教育——ブレイス語のディワン学校と在仏アルメニア学校を例に」(2012年2月13日) 講師: 松井真之介研究員

19世紀の科学と文化

(プロジェクト代表者：三浦伸夫 教授)

本年度は3回の研究講演会を開催しました。第1回は「魔女から天使へ—イタリアの女性と数学」(6月21日)で、18世紀後半の北イタリアの女性と数学文化を、三浦伸夫教授がアニーエーを中心にも多くの画像とともに紹介報告しました。第2回は

「19世紀英国科学者によるグランドツアー：チャールズ・バベッジの第2回目のツアー」(1月31日)で、協力研究員である野村恒彦氏が昨年に引き続き、英国科学者のグランドツアーの概要を示しました。まだ未開拓の研究領域であり、今後の成果が期待されるところ

です。第3回は、西洋近代が成立させた科学技術とその社会的影響を再考するため、上記2回とは違う視点で取り組みました。2月6日開催の「『放射線被曝の歴史』再考：ポスト3・11における意義を探る」です。

国際文化学部の前身である教養部には中川保雄教授がおられました。先生の絶筆となったのが『放射線被曝の歴史』です。昨年のフクシマを20年前に先取りした内容でしたので、昨年10月に増補再刊されました。それを題材として今日の問題を考えていこうと、その増補に関わられたお二人をお招きして講演し



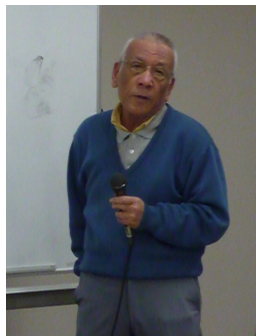
第2回研究会「19世紀英国科学者によるグランドツアー：チャールズ・バベッジの第2回目ツアー」
(2012年1月31日) 講師: 野村恒彦研究員

ていただきました。稲岡宏蔵先生（科学技術問題研究会）と中川慶子先生（園田学園女子大学名誉教授）です。稲岡先生は、御専門の立場から最近の話題を取り上げ、詳細に説明されました。中川先生は、故中川保雄先生の思い出と、これから私たちがすべきことの示唆を若い人にわかりやすく説明されました。またそれに先立ち、国際文化学部学部2年生の井沼睦さんと小松拓司君は本の内容紹介と疑問点をまとめてくれました。最後は、本書の意義について塚原東吾教授が最近の科学史研究の成果を交えて説明されました。

100名ほどの大変盛況な講演会で、専門家も一般の方も交じえ遠くからも多数の参加があり、終了後も多くの質問が飛び交いました。お二人の講演に聞き入った方も多かったのですが、さらに前座で登場した国際文化学部学生の実に内容ある報告も大変評価されたことはうれしく思います。お二人にはもちろん、準備にかかわった少なからずの学生諸君にも感謝いたします。

次年度は以上の研究を踏み台にして、さらに文化や社会の中で科学技術を考えていきたいと考えています。

[参考：中川保雄『放射線被曝の歴史』増補再刊（明石書店、2011年）]



第3回研究セミナー
「『放射線被曝の歴史』再考：ポスト3・11の意義を探る」
(2012年2月6日)
講師：稲岡宏蔵氏（左）、中川慶子氏（右）

地域連携部

（プロジェクト代表者：岡田浩樹 教授）

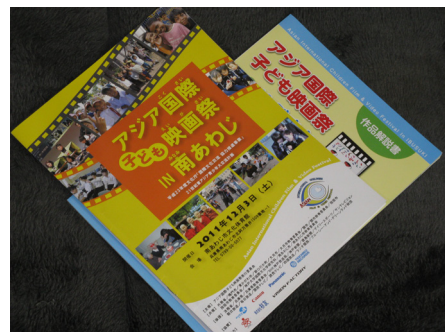
2011年度多文化共生地域連携部は、地域連携協定に基づき、(1) 兵庫県国際交流協会、(2) 神戸を中心とする在日外国人および支援諸団体、(3) 南あわじ市との地域連携活動を行いました。

(1) については、兵庫県国際交流協会が主催する Oxbridge English Summer Campの実施校として、英国 Oxford, Cambridge 大学の海外英語教育実習に協力、両校から6名の学生が来日し、国際文化の学部生40名が参加してセミナーの開催、交流を行いました。(2) については、神戸定住外国人支援センター、



Oxbridge English Summer Camp

(3) については、南あわじ市での大学院生フィールドワーク実習、アジアこども国際映画祭への協力を行いました。実習では、「文科省大学院教育改革支援プログラム」（2007-2009）の成果を発展させ、実験的 fieldwork「Photo Ethnography」の試みを行いました。国立民族学博物館機関研究員の岩谷洋史氏の協力を得て、その成果（民族誌）をWEB上で公開します。また、南あわじ市が主催したアジアこども国際映画祭に協力、大学院修士学生12名、研究生学部生23名の計35名（うち留学生9名）が、2010年度の作品の解説書を執筆し、12月3日の映画祭当日にはボランティアスタッフとして出席しました。



(上) アジアこども映画祭でベトナムからの参加者をアテンドする神戸大学ボランティア（2011年12月3日）
(下) アジアこども映画祭パンフレット

アートマネジメント地域連携部

（プロジェクト代表者：藤野一夫 教授）

毎年恒例となった神戸国際芸術祭2011は、異文化研究交流センターに実行委員会事務局を置き、神戸市民文化振興財団等と連携しながら、市民ボランティアと学生によって支えられる室内楽主体の音楽祭として定着してきました。今年のテーマは「ウィーンの情熱II」。2011年10月21日から23日まで、ウィーンゆかりの作曲家やドホナーニの作品を、ヨーロッパより直接招聘したアンサンブル・ラロを中心とする気鋭の音楽家が大熱演しました。また、マーラーとリストの記念の年に合わせて、隠れた傑作の発掘も行われ、広く市民に親しまれると同時に、ボランティアセミナーや充実したプログラムの作成によって、学術的な社会貢献にも力を入れています（参加者約700名）。

神戸国際芸術祭の関連企画として毎年、神戸大の学生が中心となって「小学生のためのコンサート」（無料招待制）を企画運営していますが、今回は5月7日（あじさいホール）と8日（すずらんホール）に「みんなでつくる！音楽フルコース」という参加型コンサートの実験をしました。レストランのフルコースの注文のように、当日の演奏プログラムのメインとデザートにあたる曲を、会場の小学生たちの投票で決めるという粋なアイディア。チェロ



(上) 神戸国際芸術祭・1日目(2011年10月21日)

(下) 3日目の出演者と運営ボランティアスタッフ(2011年10月23日)

の遠藤真理さん、ピアノの三浦友理枝さんと、アートマネジメントを学ぶ神大生たちとの長年の信頼関係があつてこそ実現できた企画。参加した小学生(約300人)にも大変好評でした。なお、その機会に急遽、仙台とも縁の深い遠藤さんと三浦さんが、東日本大震災復興支援チャリティーコンサートの開催を決意してください、公演収入の全額が被災地の芸術文化活動の復興支援に用いられました。

神戸大コミュニティコンサートvol.17「音楽物語『ぞうのババール』～みんなで歌おうこどもの歌コンサート～」が、7月12



(上) 音楽のフル・コース

(下) ザクセン声楽アンサンブル

～13日まで灘区の4か所の児童館等で開催。数多くの子育て世代の親子が日常のストレスから解放されて、質の高い演奏を気軽に味わうことができました。ソプラノの正木裕子さんも子育てをしながらブリュッセルで活躍。ピアノの日野原秀彦さんは、イタリア在住の作曲家として著名です。

11月29日には、神戸大コミュニティコン

サートvol.18「ザクセン声楽アンサンブル」による至純のアカペラ演奏が、藤野のレクチャー付で披露されました。日独交流150周年としてドレスデンから直接招聘した気鋭の合唱団による教会音楽(シュッツ、バッハ、メンデルスゾーン)の傑作を、神戸大六甲ホールを埋め尽くした聴衆(300名)が堪能。企画した学生、参加した市民たちとの交流会も盛り上がりしました。

2012年3月20日には、国際シンポジウム「アートと都市をつなぐデザインカ——グローバル・ネットワークによる成長神話の超克」を、神戸市デザイン都市推進室との連携でKIITO(神戸貿易センタービル26階、参加約70名)にて開催しました。神戸とともにユネスコのデザイン都市に認定されているベルリンからのゲストスピーカーと、日本のアートマネジメント界のトップランナーたちによるフラットな議論は8時間に及び、アートと都市とをつなぐ刺激的なアイデアや構想力が、フロア全体を「饗宴」にふさわしい知のプラットフォームに変容させていきました。同じメンバーによる関連企画として、19日にはアートマネジメント若手・学生フォーラム「子どもとアート、どうつなぐ?——日独芸術教育の事例から考える——」(KIITO、約45名)、21日には日独文化フォーラム「ベルリンのディープなアートシーンを語る」

(ギャラリー島田、約35名)を開催。グローバルなネットワークの中から新たなアートプロジェクトが生まれる予感に満たされました。



国際シンポジウム「アートと都市をつなぐデザインカ——グローバル・ネットワークによる成長神話の超克」(2012年3月20日)

本年度の活動一覧

2011 年

5月7日	東日本大震災復興支援チャリティーコンサート
5月7日～8日	「みんなでつくる! 音楽のフルコース」
6月9日	「中東民主化運動の波と新しいイスラーム地域研究」(中村寛准教授)(神戸大学イスラーム地域研究会(以下、Kobe-IAS)と共催)
6月21日	「魔女から天使へ——イタリアの女性と数学」(三浦伸夫教授)
6月28日	「イスラーム神秘主義研究の魅力と未来」(東長靖・京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授)(Kobe-IASと共催)
7月12～13日	神戸大コミュニティコンサートVol.17「音楽物語『ぞうのババール』——みんなで歌おうこどもの歌コンサート」
7月14日	「EUにおける音楽活動の現状——外国人、移民の立場」(正木裕子・ベルギー王立ブリュッセル音楽院講師、日野原秀彦・東京芸術大学講師)
7月21日	「パレスチナ人から見た災害ボランティア」(ターレク・ハルダーン・エルサレム大学講師)(Kobe-IASと共催)
7月29日	第2回国際文化のフロンティア「現代モロッコにおけるスーフィー教団の展開」(斎藤剛准教授)
8月4日～7日	南あわじ市との連携事業として大学院生フィールドワーク実習を実施
8月8日～21日	Oxbridge English Summer Camp
10月3日	JAXA(宇宙航空研究開発機構)との研究協力協定締結
10月21日～23日	神戸国際芸術祭2011「ウィーン的情熱II」を開催
11月4日	第3回国際文化のフロンティア「済州と琉球の神話比較試論」(許南春・大韓民国国立済州大学校国文学科教授)
11月28日	「中国の対中東政策」(呉彦・中国浙江大学人文学院講師)(Kobe-IASと共催)

協力研究員 活動報告

私の勤務先・内モンゴル大学

エルドンバヤル



内モンゴル大学蒙古学学院前にて

2011年の3月に内モンゴル近代史をテーマにした博士論文を無事提出してからもう一年が経とうとしています。昨年の4月から協力研究員として籍を置きながら就職活動をしていました。5月に

は故郷の内モンゴル科学技術大学の内定をもらい、6月には運良く中国の重点大学の一つである内モンゴル大学の内定をもらいました。そして、昨年の8月から正式に内モンゴル大学の蒙古学学院歴史学研究系蒙古近現代史研究所に専任講師として働き始めました。

蒙古学学院は、1995年に設立された比較的新しい学院で、主に蒙古語文学系、新聞出版系、旅行管理系及び蒙古語文学研究所、周辺国家研究所、蒙古文化研究所、蒙古史研究所、蒙古近現代史研究所、蒙古歴史学研究系等の専攻があります。その中で、モンゴル民族史を専門に研究している蒙古史研究所、蒙古近現代史研究所が最も有名で、大学内では蒙古学学院の「顔」ともいわれています。その理由は、両研究所にはモンゴル史研究で有名な日本やドイツといった国々に留学経験をもつ学者や中国国内でもトップレベルの歴史学者が多く所属しているからです。

両研究所の研究成果が大学側にも評価されて、昨年の10月に蒙古

歴史学研究系が設立されました。将来的には蒙古歴史学学院の設立を目指すものと思われます。また、蒙古学学院では日本、韓国、オーストラリア、モンゴル国等色々な国から学者を招いて学術交流会を頻繁に開いています。

私はこの大学に勤務して半年になりますが、今のところ自分の研究をしながら事務的な雑業も手伝っています。大学の環境に慣れるためには絶好の仕事です。2012年の前半期から「世界現代史」という必修科目の授業を担当することになりました。中国語で書かれた『世界現代史』という上下2冊の部厚い教材をモンゴル語で教えるので、今はそのモンゴル語訳に全力集中しているところです。

内モンゴル大学は非常に競争が激しく、競争に勝ち残るためにはまず、重要な授業科目を担当し続けることが大事です。次は、自分の研究分野に近い何らかの研究プロジェクトの一員として参加し成果をあげる。そして、国や国家教育局の研究助成金、自治区の研究助成金の何れかをもらっていい研究をし続けることが一番です。

私は今年の夏から内モンゴル大学とモンゴル国国立大学と共同で研究する「コミンテルンの対東北アジア政策及びその史料整理」

（仮題）の一員として研究を進めることになりました。また、今年の9月から北京にある中国人民大学に一年間研修することがほぼ決定していますので、これからも多忙な日々が続くそうです。

最後に、このような学術環境に恵まれた大学に就職できたことを幸いだと思っておりますし、何より私を育てて下さった神戸大学と指導教員の萩原守先生をはじめ関係者各位に感謝を申し上げる次第です。



内モンゴル大学民族博物館前にて

- | | |
|--------|---|
| 11月29日 | 神戸大コミュニティコンサートVol.18「ザクセン声楽アンサンブル——ドイツ・ドレスデンより至純のアカペラ」レクチャー・コンサート |
| 12月3日 | 南あわじ市との連携事業としてアジア国際子ども映画祭に協力 |
| 12月22日 | 「ベルギーにおける多文化共存の諸相」（三田順・日本学術振興会特別研究員、岩本和子教授） |

2012 年

- | | |
|-------|---|
| 1月16日 | 「イスラームと経済の関係：イスラーム金融の事例から」（福島康博・東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所研究機関研究員）（Kobe-IASと共催） |
| 1月24日 | 『「組み合わせ」の技法——オランダ社会におけるワークライフバランスの実践』（中谷文美・岡山大学大学院社会文化科学研究科教授） |
| 1月26日 | 研究セミナー「未来の戦争について考える——安全保障未来学の認識論」（ジャン＝ジャック・ロシュ・バンテオン＝アサス大学（パリ第2大学）教授）（科研費プロジェクト：「安全保障・戦略文化の比較研究的視座からのEU諸国の危機管理活動」と共催） |
| 1月31日 | 「19世紀の科学と文化」第2回研究会「19世紀英国科学者によるグランドツアー——チャールズ・バベッジの第2回目のツアー」（野村恒彦研究員） |
| 2月6日 | 『「放射線被曝の歴史」再考：ポスト3・11における意義を探る』（福岡宏蔵・科学技術問題研究会、中川慶子・園田学園女子大学名誉教授） |
| 2月10日 | 研究セミナー「3.11以後の思想——アドルノの『否定弁証法』に即して」（高橋順一・早稲田大学教育・総合科学学術院教授）（メディア文化センターと共催） |
| 2月13日 | 『「インド史」の歴史：前近代インド・イスラーム社会における通史的歴史叙述』（真下裕之・人文学研究科准教授）（Kobe-IASと共催） |
| 2月13日 | 「フランスのマイノリティにおける言語教育——ブレイス語のディワン学校と在仏アルメニア学校を例に」（松井真之介研究員） |
| 3月6日 | 国際ワークショップ「日欧関係の歴史・文化・政治」 |

- | | |
|-------|---|
| 3月19日 | アートマネジメント若手・学生フォーラム「子どもとアート、どうつなぐ？——日独芸術教育の事例から考える」 |
| 3月20日 | 国際シンポジウム「アートと都市をつなぐデザイン力——グローバル・ネットワークによる成長神話の超克」 |
| 3月21日 | 日独文化フォーラム「ベルリンのディープなアートシーンを語る」 |



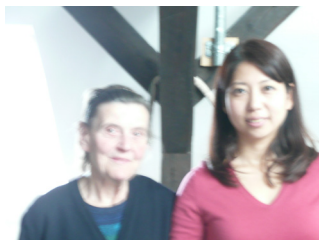
（左）第2回国際文化学の前線「現代モロッコにおけるスーフィー教団の展開」（2011年7月29日）講師：斎藤剛准教授



（右）第3回国際文化学の前線「済州と琉球の神話比較試論」（2011年11月4日）講師：許南春氏

ドイツの伝説に関する調査

植 朗子

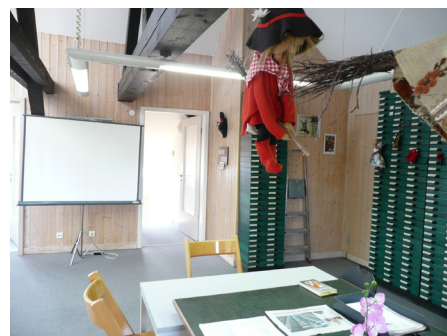


ザーゲ資料所にてGertraud Meinel先生と

2011年10月16日から、ドイツの伝説に関する調査とドイツ民俗学研究者との意見交換を目的に、ドイツ南西部のフライブルク市を中心に資料収集のため渡航した。私の研究は19世紀前半にグリム兄弟によって編纂された『ドイツ伝説集』を題材としており、この約3週間の調査旅行は、平成23年度の科学研究費（研究活動スタート支援）によって実現した。ドイツ語圏と近接する国々の膨大な伝説を集めたグリム兄弟は、『ドイツ伝説集』の名にふさわしいと彼らが考える伝説を抽出し、それをひとつの伝説集として再構築した。南西ドイツのフライブルク市のヨハネス・キュンツィヒ・インスティテュート Johannes-Künzig-Institut für ostdeutsche Volkskunde in Freiburgにある「フライブルク・ザーゲ



資料所」Freiburger Sagenarchivには、『ドイツ伝説集』をはじめとする19世紀から20世紀に編纂された種々の伝説資料が数多くあり、幸運にもグリムの出典研究に必要な資料を見せて頂くことができた。この資料所の責任者である Michael Prosser-Schell 先生と、創立者である故 Lutz Röhrich 先生の共同研究者であった Gertraud Meinel 先生のご



(上) ザーゲ資料所の外観

(下) ザーゲ資料所の内部の様子。サンルームに魔女が飛び出す煙突があるので、魔女の人形を飾っているとされている。

厚意によって、貴重な資料を写すことをご許可頂いた。これらの研究成果の一部は、すでに阪神ドイツ文学会に投稿し掲載予定であるが、さらなる研究結果については2012年度に本研究センターにおいて発表したい。

2011年夏のイベリア半島調査から

寺尾 智史



私は、2011年7月中旬から8月中旬までの1ヶ月間、これまでその保全運動の動向について継続的考察を行ってきた少数言語であるアラゴン語、ミランダ語について、「言語的原郷とされる地域」（それぞれピレネー南麓、ポルトガル内陸辺境）を中心に現状を調査してきた。その状況は、母語話者が残る地域でも、集落ごとに非常に多様な様相を呈していたが、あえてひとこと

でまとめるなら、国家言語（スペイン語またはポルトガル語）モノリンガル、もしくは「もっと経済的価値のある」言語とのマルチリンガルである多数派側の少数言語保全への興味と支援は「カネの切れ目が縁の切れ目」であった、ということになる。EUからの財政支援が大きな意味を持つEU周縁国にとって、地域少数言語保全というお題目は経済援助を引出す仕掛けとして「有益」であったが、この装置はいわゆるリーマンショック以降、機能不全を起こしており、まず「カネズル」としての経済的興味がなかった層が遠ざかった。さらに今般の南欧諸国の債務危機に及んで、本心から少数言語に関心を寄せ、母語話者に寄り添いつつ自ら習得を試みたりしていた「新話者」の層も、自分の経済生活の維持に汲々とする中で疎遠になりつつある。たとえば、2011年7月ミランダ市で予定されていたミランダ語サマー・スクールは、問合せが一定数あったものの、受講費を納めたものが数名しかおらず、結局中止となってしまった。「財政支援によってかろうじて維持されていることば」という構図さえも瓦解した今、話者たちはその継承を図るうえで方法論の根本的転換を迫られていることを実感した調査であった。

ラサ市の観光産業発展の動態

山田 勲之



2011年8月24日～9月24日にかけて、チベット自治区ラサ市の観光産業発展の動態を探ることを目的に、旅行会社、ホテル、

ラサの中心・ジョカン前にて、五体投地する人々



カターを売る屋台(ジョカン前広場)

ことがわかった、一方、小規模な土産屋の経営者にはチベット族が大多数を占めているが、彼らの出身地はラサよりも四川や甘肅、青海出身者が多く、ラサがチベット族にとって出稼ぎの目的地の一つになっている現状も見えてきた。

個別の商品を見
てみると、仏像な
どはチベット産で
はなく、ネパール
産が多数を占めて
おり、直接カトマ
ンズへ買い出しに
行くチベット人商
人も見受けられた。
そのため、今回ネ
パールにも調査の



仏像の工房(ネパール・パタンにて)

足を延ばし、その結果カトマンズ近郊の町・パタンのネワール族の工房から仕入れていることが判明した。一方、土産屋のなかでもカターを売る経営者のほとんどは漢族で、しかも四川省成都市近辺の出身者が多い。今回、成都にも2日間滞在し、調査したところ、カターの工場、問屋は成都に存在することがわかった。つまり、生産、卸し、小売のほぼ全てをチベット族ではなく、漢族が担っていることがわかった。

今後は調査対象を新疆、内モンゴルへと広げ、相互比較をし、より一層の研究の深化を図りたい。

土産屋の聞き取り調査を行った。

その結果、旅行会社やホテルなどの経営者には確かに漢族出身者が多いが、独占的というわけではなく、チベット族経営者も相当数存在する

潔性、結束性)について説明し、認識及び理解を求めることにした。

私の研究テーマは「文の結束性に関する日中対照研究—主題の省略の視点から—」であるため、収集してきた学習者の作文データから見られた主題を含める名詞句の省略に関するものを中心に考察・分析を行った。被調査者はのべ24名である。そのうち、男は4名で、女は20名である。研究課題について、中国人日本語学習者にとって中級レベルの段階において名詞句の省略に関する知識を導入する必要があるかというように設定した。二回にわたって収集してきたデータを次の二つのレベルに分けて考察を展開した。

- ア) 文レベル:文の簡潔性を考察するために、名詞句の不省略の使用実態を明らかにする。
- イ) 談話レベル:文の結束性を考察するために、名詞句の省略の使用実態を明らかにする。

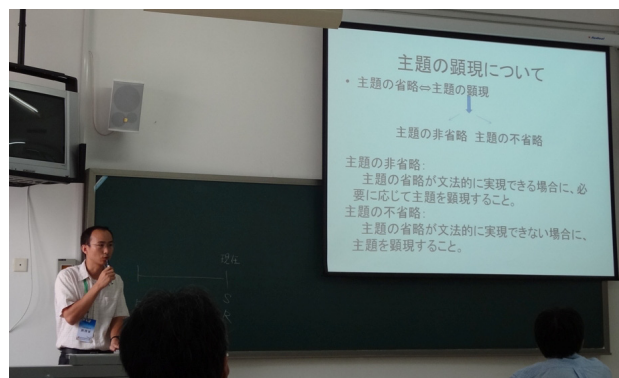
2回の調査データを以上の二つのレベルに分けて考察・分析を行った結果、第1回と第2回のデータから名詞句の省略に関する学習者の使用実態が見られた。第2回は第1回と比べると、名詞句の不省略に関しては、使用数が下がり、つまり、文の簡潔性がよくなっているのである。次に、主題の省略に関しては、使用数が上がり、つまり、文の結束性がよくなっているのである。この2点から、名詞句の省略に関する知識の導入が必要であるといえるだろう。また、これ以外に2回のデータを全体的に見れば、学習者の間では共通しているものが観察できた。文レベルの場合では、2回ともに第一人称代名詞(わたし、僕など)が必要以上に使用されたことにより、文の簡潔性にマイナスの影響が与えられたことが分かった。談話レベルの場合では、文の結束性に関する名詞句の省略の形式は主に「人称代名詞+は」というものが数多く見られた。また、不適切な名詞句の省略により、文の簡潔性が良くなるにも関わらず、全体的には意味不明になってしまい、文の結束性の形成に大きなダメージを与えている。このことは、一般的に名詞句の省略に関する知識が不足しているため、起こりやすいものであると言われている。

今年度の調査研究を通して、これからの日本語教育の基礎段階に名詞句の省略を導入する必要性を訴えることができたと考えらるきっかけとなった。来年度、引き続きこの研究課題を注視し、より具体的な導入方法を明らかにしようとする。

日本語作文データに関する調査研究

劉 澤軍

今年度、私は協力研究員として、中国の天津にある大学で研究調査を行った。調査対象は日本語を専攻とする大学の一年生(中級レベル相当)である。2011年6月7日と6月15日と、「私の故郷」というテーマを学生に与え、2回にわたって彼らの作文データを収集してきた。2回目が実施される1日前に、被調査者としての学生に1時間程度日本語の「名詞句(名詞のみならず、名詞を中心とする連語など)の省略」(「φNは」、「φNの」等)の二つの主な役割(簡



第十回世界日本語教育研究大会での口頭発表(2011年8月19日~21日、天津にて)

= IReC News =

神戸大学国際文化科学研究科は、2011年10月3日にJAXA（宇宙航空研究開発機構）大学等連携推進室と人文・社会科学分野における研究協力協定を締結いたしました。写真は相模原市のJAXA大学等連携事務室において行われた提携の様子です。JAXAにおいては、初の人文・社会科学系の大学院・学部との協力協定締結です。国際文化科学研究科にとっても、グローバル化（地球化）が進展する今日的な問題への取り組みを進展させ、学際性を生かした新しい分野の開拓を期待しております。いわば国際文化の宇宙への挑戦です。JAXAとの連携事業においては、IRECは新しい研究領域に取り組む他大学や他領域の研究者のネットワークのHUBとして機能することを目指しております。宇宙への人文社会分野からのアプローチに関連する研究プロジェクトや学部・大学院での宇宙学教育など、具体的な連携協力事業を実施する方向です。現在、2012年度の連携事業について、IRECとメディア文化研究センター合同の連携委員会を組織し、JAXAと協議中です。



安部隆士・JAXA大学等連携推進室長（左）と
阪野智一・国際文化科学研究科長（右）

異文化研究交流センター ニュースレター 第2号

発行日：2012年3月30日

編集・発行：神戸大学大学院国際文化科学研究科・異文化研究交流センター

連絡先：〒657-8501 神戸市灘区鶴甲 1-2-1

電話・FAX：078-803-7650

E-mail：irec@ccs-srv.cla.kobe-u.ac.jp

ホームページ：http://web.cla.kobe-u.ac.jp/group/IReC/

印刷所：神戸大学生生活共同組合

■ 本年度の研究報告書



A4版、125頁

神戸大学大学院国際文化科学研究科
異文化研究交流センター（IReC）
2011年度 研究報告書

ヨーロッパにおける多民族共存とEU
——言語、文化、ジェンダーをめぐって——
および
日欧関係の歴史・文化・政治

編集 坂本千代
(国際文化科学研究科教授)
2012年3月発行

本報告書は、当センターの2011年度プロジェクト「ヨーロッパにおける多民族共存とEU——言語、文化、ジェンダーをめぐって」、およびIReC研究部との連携事業である神戸大学主催国際ワークショップ「日欧関係の歴史・文化・政治」の活動をもとに編集したものです。本報告書の内容は、当センターのウェブサイトでも公開しております。

編集後記

縁あって、この度異文化研究交流センター・ニュースレター第2号の編集を担うことになりました。年度末の限られた時間に上記の研究報告書の編集作業と同時並行での作業となりましたが、なんとか無事発行まで至ることができました。これもひとえにご執筆下さった諸先生方および協力研究員の皆様お力添えによるものと深く感謝申し上げます。

(学術推進研究員：石黒 大岳)



◆交通アクセス：阪神「御影」、阪急「六甲」、JR「六甲道」下車。
市バス16系統「六甲ケーブル下」行に乗車。
「神大国際文化学部前」下車。徒歩3分。